

雲雀祭（学園祭） 実行委員の取り組みについて

多摩大学経営情報学部 学園祭実行委員長 梅田 裕介

第25回雲雀祭は初日曇天、最終日は終日雨天だったが無事に終えることができた。これは一年間誠心誠意準備してきたメンバーの努力の賜物である。今年の実行委員はたった13名、OBOG数名、多摩大生と白百合女子大生のヘルプにより無事に開催することができた。昨年からの継続メンバーはかなり少なく、新メンバーの方が多い状況ゆえに後輩へ仕事の指導や面倒が行き届かず辛い思いをさせてしまったことだろう。

私が委員長を引き受けたのは、今まで以上に後輩の意見を聞き、新たな風を取り込むことによって組織の変革を図りたいと思ったためである。今までは上へ様々な意見を言ったものの何となく流されてしまうことが多く、辛い思いで一杯だった。だからそれを変えてやろうと思志した。しかし、この立場に立ちようやくその先輩方の気持ちを知ることになる。昨年は「こんな簡単なことなのに、どうして」と思っていたことがそれを取り巻く様々な環境を把握できる状況になることでその難しさを痛感すると同時にもどかしさで溢れた。

私は組織のリーダーを初めて務めた。一グループ数名規模の場合には経験があるが、一組織のリーダーは初めてだった。ゆえにメンバー、特に後輩に対しては多々迷惑をかけてしまった。また単なる一メンバーなら意見を言うにもお構いなしに話せることでも、組織を率いていることを自覚しつつ意見交換するのはなかなか難しいことだった。私の意見で全ての決定をもつことが大変な重みであることを強く感じた。

今回、委員長職を通して最も苦労したことは、全部署の仕事の進捗状況の把握とそれを遅滞なく、押し進めることだった。もちろん、これは当然のことであるが、それが非常に大変だった。最終的に学園祭を無事に迎えることはできたが、そのプロセスは遅れに遅れ本当にギリギリの状態での

開催となった。部署は連鎖的に仕事が進んでいくため一部署でも仕事が遅れば他にも迷惑がかかる。仕事が進んでない部署に発破をかけても思うように進行せず、意見の食い違いから仲間割れが発生したことは少なくない。またそれが原因でメンバーから外れた者もいた。私にリーダー経験がなく、さらに不器用ゆえにその原因がわからないことも多々あり、頭を抱え込む日々が続いた。ストレスが原因で食事を取れない日や一日一食の日が続くなどで体重が6kg落ち、慢性的に体調が悪くなった。

そのような中で親身に相談に乗ってくれたのは学内のある人と酒井ゼミ三年生の存在である。後者に対しLINEなどでその辛い胸の内を明かすと励ましの言葉や元気づける写真を送ってくれるなどしてくれた。何度助けられたことだろうか。面と向かっては恥ずかしいのでこの場を借りてお礼を言いたい。

最後に、この一年間は波乱万丈なものであった。何かを得るには何かを失わなければならないという偉人の言葉にもあるが正しくその通りだった。今回の夏休みは長期休み毎に出かけている海外一人旅も取り止めたくらいだ。そのぐらいの覚悟なしに中途半端な気持ちでは最後まで成し遂げられなかったと実感する。精神面でも肉体面でも相当ハードではあったが、それ相応のやりがいはあったと断言できる。是非、次期委員長にも頑張ってもらいたい。



学園祭実行委員

浜田ゼミ生が雲雀祭（学園祭）で得た仲間の大切さ

〈広報部 2年 原地 将甲〉

10月19日（土）～20日（日）の2日間に渡り学園祭が行われました。浜田ゼミは昨年に引き続き参加し、「わたあめ」と「フランクフルト」の模擬店を出店しました。1日目2日目ともに悪天候に見舞われましたが、来校者の方にたくさん来ていただき、見事 MVP 賞をいただきました。MVP 賞とは模擬店の中で最も頑張っており、取り組んだ団体に送られる賞のことです。学園祭当日までの間、浜田ゼミでは企画部のメンバーを中心に会議を開き、またゼミ生全員が一致団結し各自の担当に分かれて学園祭当日までの準備に取り組みました。

〈企画部部長 3年 川邊 綾華 活動内容〉

学園祭で出店するにあたり、企画部は学園祭が開催される約半年前から動き始めていました。企画部では、まずその企画に関する「目的・目標」を定めます。今回の学園祭の目的は「組織で実践的な経営を学び、利益のあがる運営を学んでいく！」とし、目標は「売上金額1位の団体になる！」というものにしました。浜田ゼミでは、その目的・目標を達成するため、ゼミ生全員が一丸となり、販売する商品決めから大まかな販売戦略までを考えていきます。途中夏季休業が挟まり、夏合宿中に行われた会議を含め、学園祭が開催される間に計3回の会議が行われました。そこで出た意見やアドバイスなどは、一度全て企画部で持ち帰り、より良い当日を迎えられるように最善を尽くして動き、考えるように努めました。その結果、先で行われた学園祭ではたくさんの方々がお越しくださり、とても賑わいのある2日間となりました。売上団体1位という目標は達成できなかったのですが、浜田ゼミは全店舗から1店舗だけ選ばれた MVP 賞というのをいただくことができ、笑顔で締めくくることができた学園祭となりました。

〈学園祭リーダー 2年 守屋 佳奈美 感想〉

今回の学園祭では、準備から当日までたくさんの問題が発生し、その度

にゼミ生と会議をして試行錯誤してきました。学園祭での活動を通し、多くの方に助けていただき無事に目標を達成することができました。正直、とても辛く何度も挫けそうになりましたが、学園祭終了後、得るものは多く達成感でいっぱいです。そしてなにより学園祭のダンスやビンゴ大会など様々なイベントもあり、来校者の方やゼミ生と沢山会話をすることもできました。とても楽しかったです。学園祭実行委員の方をはじめ、浜田ゼミの皆さんや助けていただいた方に感謝しています。ありがとうございました。浜田ゼミは、仲間が支えあうことで学園祭を成功させることができました。

〈広報部 2年 益子 明香里〉

今回の学園祭で得たものはとても多く、特に仲間の大切さを学ぶことができました。浜田ゼミでは、目的・目標に向けてゼミ生全員で団結することができました。今回の反省等を踏まえて、来年の学園祭をより良いものにしたいです。



学園祭での集合写真

私にとってのアジア

経営情報学部 マネジメントデザイン学科 3年 蛭田 毅

私は多摩大学で学ぶことになってから三年間が経過しました。この多摩大学は寺島実郎学長が率いていることもあってか、常にアジアダイナミズムを唱えてきました。私もゼミ、講義等の大学生活の中で、アジアダイナミズムに感化され「私にとってのアジア」を脳裏に描くようになりました。「私にとってのアジア」とは、アジアにおいて誰もが平等であり、学びあうことができ、誰もが競いあう、そのような世界です。しかし、こうした「私にとってのアジア」とは日々のゼミ、講義、本、ニュースなどで構築されたものであり、その全てが知識によったものでありました。

私は海外経験が乏しく、過去に修学旅行でマレーシアに一度訪れただけに過ぎません。そのマレーシア旅行でさえ先生、友人の指示に従っていただけであり、積極的に現地の人と触れ合おうとは考えていませんでした。実質的な海外経験は皆無と考えるべきでしょう。そのような、日本の価値観しか取り込んでいない「私にとってのアジア」とは、実体の欠けたともあやふやなものでした。

そのような現状の中で、私は濟州島フォーラムに参加する機会を頂きました。当初はあまりに急な誘いであったために断りました。しかし、改めて考え直すとまたとない絶好の機会であることに思い至りました。日本を代表する著名人に会えることも理由の一つでしたが、様々なアジアの方に会うことによってアジアを肌で感じ取り、「私にとってのアジア」を補完できるのではないかと考えたからです。そうして、私の濟州島フォーラムへの参加は決まりました。

五月三十日、私は成田空港から濟州島に飛びました。飛行機に乗ること僅か二時間で到着しました。日本と韓国の地理的距離がこんなにも近いことを改めて実感しつつ入国審査を通過し、バスに乗ること一時間でフォーラム会場に到着しました。そこで、昼食を食べたあとは、日本語翻訳されているセッションに参加しました。その後はフォーラムの晩餐会に参加し、韓国の様々な伝統文化を見ることができました。その後、日本訪問団の会合を経て一日は終わりました。その日はもはや旅行気分であり、当初の目的は忘れ去られていました。

旅行気分であった濟州島フォーラムから一転したのは、二日目のジム・ロジャースの講演の時でした。彼は伝説の投資家として有名であり、どのような講演を聞けるのかと非常に期待していました。そして、講演が終わった後に最も印象に残った言葉は「私は娘に絶対に日本語を教えないだろう」というジョークでした。私はこの言葉を聞いた時、思わず手に持っていた手帳を握り締めました。

ジム・ロジャースには一つの考えがありました。国の経済力とは人口と比例するため、人口が減少傾向となる少子高齢化に進んだ場合、その国の将来に見込みはないだろうというものです。ジム・ロジャースからすれば、日本の人口はまさに少子高齢化であ

り改善する見込みもないため、その将来には悲観せざるを得ないのでした。その結果の発言が「私は娘に絶対に日本語を教えないだろう」でした。私はこの言葉に憤りを感じましたが、同時に納得させられました。彼は経験と理論の両面から説明していたからです。そして一つの疑問が生じてきました。なぜ私は憤ったのかという疑問です。

最初は単に日本を悪く言われたために反射的に反応をしてしまったのだと考えました。しかし、それではかつて尖閣、竹島、北方領土問題を調べていた時に、中国、韓国の意見を知るたびに憤りを感じていることになりませんが、そのようなことはありませんでした。もう少し深く考えてみることによって、その答えは分かってきました。それは、人口を理由に将来を悲観視された経験がなかったからです。すなわち、聞きなれない文句であったために思わず憤ってしまっただけなのです。

そこでまた新たな疑問が浮かび上がりました。何故聞きなれないなかったのかです。ジム・ロジャースの発言はきわめて常識的なことであり、普段から耳にしているもおかしくありません。それでは何故なのか。それにはその言葉を聞いた場所が韓国であることを思い出したその瞬間に、その答えは出せました。そこが日本でないからです。

日本人には愛国心が足りないなどといわれることがありますが、少なからず母国を尊重する心を持っています。そのため、日本の将来について悲観的に考えながらも最終的には楽観的に考えるものです。その過程が現実的であるのかどうかといった問題は関係ありません。その結果、日本に対して強く否定的に考えること、発言する人は少なくなります。日本が少子高齢化だから「私は娘に絶対に日本語を教えないだろう」とまで言い切る人は少ないでしょう。しかし、海外から日本をみれば、愛国心というフィルターを除いた日本を見ることが出来ます。母国を知るためには、母国からの知見と外国からの見解を知る必要があるのです。このことは、全ての国にも言えることでしょう。

「私にとってのアジア」の一つに「学びあう」というものがあります。この言葉は私のお気に入りであり、今まで習ってきたアジアダイナミズムから借りて来たものです。しかし、ただ借りてきた言葉であったため、実体を伴った言葉ではありませんでした。ところが、今回の経験を通じて「学びあう」という言葉が明白なものとなりました。「学びあう」とは技術等を交換するだけのものではなく、学びあうことによってお互い存在を知り、確立し合うことなのです。

今回濟州島フォーラムを経て、「私にとってのアジア」を僅かながらにも実体が見えていました。今後も経験を得ることによって「私にとってのアジア」を確立し、将来役立てることができればと思います。



韓国の伝統文化



濟州フォーラム会場・滞在先ホテル：Haevichi hotel & resort



濟州民族村博物館にて集合写真

〈プロジェクトゼミ〉

メディア実践論の制作現場から

わが愛しのエフエム多摩！
～地域を繋ぐコミュニティFMの復活を夢見て～

経営情報学部 2年 吉野 翔

2010年3月31日、エフエム多摩は閉局した。

「コミュニティラジオ」というものをご存知だろうか。限られた範囲の地域に電波を出して、地域密着型の番組を放送する、地域に根づくFMラジオ局だ。多摩大学があるこの多摩地域にも、コミュニティラジオ局があった。それがエフエム多摩だ。地域の企業や大学がスポンサーとなり、番組を制作し、市からの支援によって補っていった。しかし、広告費の減少により赤字が続き、放送機材の更新ができず、放送を続けることが困難になってしまった。閉局時の累積赤字は4500万円に上った。

私は多摩で生まれ、多摩で育った。小学校、中学校ともに「多摩」という言葉が入り、大学も多摩大学。なによりも私が愛する多摩なのだ。そしてプロジェクトゼミ「メディア実践論」。はじめは映像制作について学ぼうと考えていたのだが「コミュニティメディアの調査、研究」も活動の柱になっていることを知り、かつてこの地域で親しまれたエフエム多摩も研究対象になることに気づいたのだ。昔聴いていたエフエム多摩の閉局に大きなショックを受けた私は、もし、私たちの手で再建することが出来るなら、そう考えたと鳥肌が立った。

今時何故ラジオなのか、という疑問を持つ人も少なくないだろう。それは、私の人生と大きく関係している。私は小学5年生で学校に行けなくなった。所謂、不登校という状態で、中学3年生の夏まで続いた。はじめがあったわけでもなく、学校に行けなくなった理由は今では思い出せない。その間、人との関わりを避け、ずっと家にいる生活が続いていた。そんなときラジオの音が耳に飛び込んできた。声だけだが、あたかも自分がそこにいるかのように、はっきりと感情が伝わり、自然と笑顔になっている。毎日のようにラジオを聴いた。気がつくと、人と会話をしたいと思うようになっていた。そして、中学3年の夏、学校に戻った。ラジオによって明るく話すことができるようになり、友達もできた。私の人生はラジオによって救われたのだ。

しかし、なぜコミュニティFMに目を向けるのか。

私を揺り動かした一番のできごとは、2011年3月11日に起きた東日本大震災だ。あの時私は高校の授業中で、多摩にはいなかった。携帯の充電切れによって家族との連絡が途絶え、翌日朝帰宅するまで一切の情報が入らなかった。やはり一番の心配は家族の安否だった。後日、被災地でのコミュニティFMの活躍を目にし、耳にした。地域の情報を密に放送することができ、家族の安否まできめ細かくラジオが伝えている。そこに住む人が切実に必要としている地域の情報をひたすら伝えることができるのは、コミュニティFMだけだった。あの日多摩にもコミュニティFMがあれば、そう私は考えた。

私は多摩が好きだ。昔、嫌悪感を抱いた同級生や迷惑をかけた先生と、もう一度繋がりたい。多摩に住む人の役に立ちたい。人との繋がりの大切さを多摩の人に思い出してもらい、多摩地域を繋ぐ放送局を私たちの手で復活させたい……。

とても難しく時間のかかるテーマだ。しかし、コミュニティメディアの調査、研究をきっかけに、私の夢は広がるばかりだ。



ヒアリングで訪れたFM西東京で



当時のエフエム多摩の
ステッカー

大人も子供になれる国「こどもの国」

経営情報学部 2年 芹澤 誠

まわりの木々が色づきはじめ秋の訪れを告げている。前に訪れたのは新緑の季節、こどもの日だったが、歓声とざわめきがこだまする休日の賑わいは変わらない。「こどもの国」は子供だけでなく大人も純粋な気持ちに還って遊ぶことのできる不思議な力をもつ場所だと、ここに立つたびに思う。

私は横浜市青葉区に15年前から住んでいる。近所におすすめの場所はあるか、と聞かれれば私はためらいなく「こどもの国」を挙げるだろう。ここは多摩丘陵の自然を生かした約100万平方メートルの広大な「遊び場」である。休みの日には親子連れ、カップルなど様々な人が集まる。

「こどもの国」は今でこそ人々の憩いの場であるが、戦時中は旧日本軍が保有していた最大規模の弾薬製造貯蔵施設だった。敗戦後は田奈弾薬庫として米軍に接収されるが、日本に返還された後、1959年の当時の皇太子のご成婚を記念して、国費や民間からの寄付によって跡地を整備し、1965年5月5日に「こどもの国」として開園した。

ゲートを入ってまず目に飛び込んでくるのは、大人も子供も一心にアスファルトの地面にチョークで絵を描いている姿だ。いつも感動を覚える光景だ。ここに来ると、大人と子供を隔てるものが一瞬にして消え、一人のヒトのここを取り戻すことができるのではないと思う。

ここには数えればキリがないほどさまざまな施設がある。広場にはじまり牧場、100メートルもある滑り台などの遊具、ボート乗り場、遊歩道、夏にはプール、冬はスケート場が開く。牧場ではポニーに乗ることもでき、牛の乳搾りの体験、小動物とのふれあいの場も設けられている。また時々バター作りや焼き物の体験もできる。休日はこれらの場所はいつも大賑わいだ。

私がこの「こどもの国」に広がる世界を映像構成で描いてみたいと思ったのは、ここが思い深い場所だからである。小学校の遠足では毎年のようにここへ赴き、友人達と走り回り、プールで泳いだりした思い出もある。だが中学、高校と時間を経るにつれて「こどもの国」は遠い場所になっていった。とともに、どこかで失いそうになっている感性やこころのゆとりというものがあるのではないかと感じるのだった。プロジェクトゼミという機会を生かし、私のこころの故郷ともいえる「こどもの国」を見つめなおしてみようと思ったのだ。

取材のため何度か「こどもの国」へ足を運んだ。遊歩道を散歩している時、子供の視点と大人の視点ではこどもの国での過ごし方が少し変わるのだと気づくこともある。しかし、いつでも大人も「子供」になれる、そんな「ときめきの場所」であることに一切変わりがないことに安心するのだった。

スライド構成による映像制作もいよいよ終盤。「こどもの国」を映像にすることというのは、子供の頃の思い出と大人になりつつある現在の私を見つめることにほかならないと痛感する日々だ。



「こどもの国」ゲート前景：
親子連れでにぎわう「こどもの国」



チョークで絵を描く姿：
子供も大人もチョーク絵に熱中



SGS で学んだこと

グローバルスタディーズ学部 3年 大高 祐菜

グローバル社会が進んでいる中、英語とコミュニケーション能力が必須だと私は感じ、少人数かつ英語での授業を主とする SGS へ入学した。SGS では少人数クラスで、聞くだけの授業ではなく話し合う授業と知り、人前で話すことの苦手な私にとって克服のいい環境だと思ひ大学生活は何事も挑戦しようと思ひ決意した。

1 年次には春休みにカナダへヶ月間語学留学に行った。はじめの 2 週間は知らないことばかりで学校の先生や生徒、ホストファミリーとの交流がとても楽しかった。しかし、話したいことがあっても英語にできなくて悩んでしまい、言わないことが多々あった。その時、このまま受身の留学ではもったいないと感じ、できるだけ発言するよう心がけた。「間違っていたらどうしよう」という思いは捨て何でも話すようにした。その結果話が弾むようになった。それからはホストファミリー、学校の友達や先生と話す機会が増え、冗談なども飛び交い会話がとても楽しくなった。留学を通して TOEIC のスコアが 100 点近く上がり自信へと繋がった。

2 年次は国内インターンシップの授業で NPO 留学協会へ 10 日間インターンシップに参加した。仕事内容は主に事務仕事である。事務仕事に興味があった私にとっていい機会であり、NPO 留学協会の人や他大学のインターンシップ生の人たちとたくさんお話ができて、とても有意義な日々だった。さらに、NPO 留学協会は他社との繋がりが多く、何回か他社訪問に同行させて頂いた。様々な業種の方からお話を聞き、自分の知らない業界を知り、仕事への視野が広がった。

3 年次では学部長の紹介で American School In Japan へ 10 日間インターンシップに参加した。ASIJ は日本にあるが、門を一步はいればそこはアメリカ。すべてアメリカンスタイルであり、驚くことがたく

さんあった。流暢な英語と積極的で責任感のある高校生達を見てると自分も頑張らなければと必死になった。初めは、彼らの会話を聞くことが精一杯であったが、うまくコミュニケーションがとれるようにと通勤時間は英語のラジオを聞くなどできるだけ英語に触れる時間を増やした。また、休み時間などに積極的にスタッフや先生方と交流した。だんだんと自分からも会話できるようになり、毎日楽しかった。インターンシップを通して学んだことは、何事にも積極的に取り組むことで、社会にでる際必要な積極性や責任感の強さへの成長に繋がるといことである。また、環境がとても大事だと思ひた。これからは先生や留学生と英語で会話するよう心がけ少しでも多く英語に接する環境をつくり、英語力を高めていこうと思ひた。

SGS は友達や先生方と深く関わることができる。色々な経験の機会を与えてくれたのは SGS だと思ひた。これからもどんなチャンスも逃さず日々たくさんの方に挑戦し、期待以上の成果を得られるよう努力したいと思ひた。



ASIJ の先生と生徒



カナダ留学の卒業パーティー

点と点が繋がる時まで自分を信じる

グローバルスタディーズ学部 3年 小池 耕平

「点と点の繋がりは予測できません。あとで振り返って、点の繋がりに気付くのです。今やっていることがどこかに繋がると信じてください。」Apple 社創設者のスティーブ・ジョブズ氏が卒業生に向けて送った餞の言葉だ。将来とは見通しのきかないものであり、今、自分のやっていることがそのまま自分の将来に繋がることは少ない。だが、紆余曲折を経て、己の目標が達成出来た時にはその紆余曲折での出来事こそが成功への鍵であることが多々ある。スティーブ・ジョブズ氏はそのことをよく理解していた。だが、大学生はその紆余曲折の道に迷うことに戦々恐々としている。私もその一人だった。

ひたすらリスクを避け、ひたすら安定を渴望し、残りのモラトリアムを謳歌することが至極当然の様に振る舞う大学生。私はそんなツマラナイ大学生になる為に多摩大学に入った訳ではない。私は多摩大学のグローバルスタディーズ学部生として入学した以上は「英語」を極めたかった。そのため、大学一年生にも関わらず秋学期に半年間、アメリカの UCLA へ語学留学をした。私はそこであらゆることを経験してきた。

留学先の大学では日本人が苦手とされていたプレゼンテーションの講義で最優秀評価の「A +」を授与され、自分なりに楽しんでた留學生活だった。そんなアメリカでの生活では、日本とは決定的に異なる点があった。それは「自分の責任で、自分で行動する」だ。集団で何かすることを強要される訳ではなく、全て自己責任の原則に基づいて個人が行動する。私はいつの間にかこの自己責任の精神を取得し、自らの行動規範としていた。これこそがアメリカ留学で私が得た成果だと思ひた。

私は帰国後、その自分で行動することを信念に様々な学外活動に参加してきた。例えば、国際学生シンポジウムという、大学生で構成される大規模な討論会で社会問題について二泊三日の泊まりこみで時間の限り、議論し尽くすというものに参加した。

特に学外活動の中で最も刺激的で為になったものは、学生シンクタンクの「WAAV」が主催している、学生のための政策立案コンテスト「GEIL」に参加した時だった。このコンテストでは一週間、初めて会う人と四〜五人でチームを組み、割り当てられた問題に関して、改善する為の政策をつくり、最後には官僚や労働団体などの有識者の審査員前で自分達の政策をプレゼンテーションするものだ。私はメンバーからの推薦でその最後のプレゼンテーションの担当を任された。百人近くいる観客前でプレゼンテーションしたのは説明しがたいほど緊張したものだった。結果的に審査員達から高く評価をされ、私達のグループは最優秀賞を頂き、優勝した。

振り返れば、私がこの政策コンテストで優勝したことも、「点と点」が繋がった瞬間」だと思ひた。アメリカ留学時に受講していたプレゼンテーションの講座やシンポジウムなどで得た知識、経験が思いもよらぬ所で発揮された結果だった。

今やっていることが思いもよらぬ結果を呼び起こすこともある。あとで振り返った時に、その点と点の繋がりに気付くのです。今はただ自分のやっていることがどこかに繋がると信じるのみ。



NY の一人旅でその場で仲良くなった友人達



留学先で卒業証明書を受け取った後にクラスメートと

